

ISSN 1882-0468

ISSN-L 1882-0468

# NDL 書誌情報ニュースレター

2010 年 4 号(通号 15 号)

## 目次

電子ジャーナル、デジタルアーカイブと ISSN—第 35 回 ISSN センター長会議参加報告	1
(逐次刊行物・特別資料課 堀純子)	
メタデータの更なる機能向上に向けて—2010 年ダブリンコアとメタデータの応用に 関する国際会議(DC2010)参加報告	4
(収集・書誌調整課 佐藤良)	
新時代の目録規則へ向けて—平成 22 年度第 96 回全国図書館大会第 13 分科 会参加報告	8
(収集・書誌調整課 東弘子)	
お知らせ: OCLC を通じた JAPAN/MARC の利用提供を開始しました	13
(収集書誌部)	
お知らせ: 平成 22 年度書誌調整連絡会議を開催しました	14
(収集書誌部)	
掲載情報紹介	16
編集者からの一言	17

## 電子ジャーナル、デジタルアーカイブと ISSN—

### 第 35 回 ISSN センター長会議参加報告

ISSN（国際標準逐次刊行物番号）ネットワークのセンター長会議が、2010年10月6日～8日の3日間、英国図書館ポストンスパで開催されました。ISSN ネットワークには86カ国が参加していますが、今回の会議には、フランスにある [ISSN 国際センター](#) を含む28カ国37名が参加し、日本からは [ISSN 日本センター](#) である国立国会図書館が参加しました。



会議が開催された英国図書館ポストンスパの建物

今回の会議での重要なテーマは、同一内容の逐次刊行物について、冊子体、ポーン・デジタルの電子ジャーナル版、冊子体からのデジタルアーカイブ版の、各媒体への ISSN の付与方法の確定でした。前回の第34回会議[1]で国際センターから付与方法の具体的な提案が示されて以降、ISSN ネットワークが運営する Web 上の「ISSN Community」[2]やメーリングリストで議論が継続されてきました。2010年6月には、提案内容を整理した国際センターの原案（Option1）が示され投票が行われました。

#### Option1

この Option は、2つの提案から成る。

- a) デジタルアーカイブは、冊子体の別媒体の版とみなし、新しい ISSN を付与する。
- b) デジタルアーカイブと、冊子体と同一内容の電子ジャーナルには、共通の ISSN を1つ付与する。

この Option1 を図示すると以下ようになります。



ところが、スロバキアセンターから、冊子体とそのデジタルアーカイブに電子ジャーナルとは別の共通の ISSN を付与する案と、冊子体、デジタルアーカイブ、電子ジャーナルのそれぞれに異なる ISSN を付与する案の 2 つが提案され、投票は複雑な結果になりました。

そのため、国際センターから、スロバキアセンターの案を一部取り入れ、電子ジャーナルに ISSN を付与する時点で、冊子体の刊行が継続しているかどうかを考慮する修正案が示され、8 月に再度投票が行われました。この修正案は多数の賛成票を集める一方で、反対国からだけでなく賛成国からも懸念が示され、もっと議論が必要であるとの意見も出ていました。



ISSN センター長会議の会議風景

会議前に調整がつかなかったこのテーマは、第 35 回会議の方針を確定することが目標とされ、会議 2 日目に議論されました。各国から懸念が出ていた修正案は、国際センター自身によって冒頭で撤回され、最初の投票時に示された Option1 とスロバキアセンター案を中心に議論が進められました。議論の中では、同じ資料で複数のデジタルアーカイブがある事例や、新聞社のサイト内で複数の逐次刊行物が提供されている事例など、具体例を挙げて ISSN の付与方法を検討する場面もありました。議論終了後 3 度目の投票が行われ、多くの票を集めた Option1 に方針が確定しました。なお、日本センターではすでにこの方法で ISSN を付与しています。

会議では、ブログを ISSN の付与対象とするかどうかについても多くの時間が割られました。媒体が多様化し、複数の逐次刊行物がサイト上で総合的に提供されるなどの電子的な環境がますます発展する中で、ISSN の付与対象や付与方法（何にどのような番号を付与するか）については、どこのセンターでも判断に悩むことがあるようです。今回のように ISSN ネットワークで議論と検討を繰り返しながら付与方法を決定していく必要性は、今後ますます高まるのではないかと思います。

堀 純子

(ほり じゅんこ 収集書誌部逐次刊行物・特別資料課)

[1]第 34 回 ISSN ナショナルセンター長会議については、NDL 書誌情報ニューズレター2009年4号 (通号 11号) をご覧ください。

堀純子. 電子媒体とISSN—第 34 回ISSN ナショナルセンター長会議参加報告

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3507137\\_po\\_2009\\_4.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3507137_po_2009_4.pdf?contentNo=1)

[2]ナショナルセンター同士で意見交換できる参加者限定サイト。

## メタデータの更なる機能向上に向けてー

### 2010年ダブリンコアとメタデータの応用に関する国際会議 (DC2010) 参加報告

2010年10月20日～22日の3日間、米国ペンシルベニア州ピッツバーグのヒルトンホテルで「[2010年ダブリンコアとメタデータの応用に関する国際会議 \(DC2010\)](#)」が開催されました。この会議は、ダブリンコア (Dublin Core) などのメタデータに関する研究発表や意見交換の場として毎年開かれており、今回は[米国情報科学技術協会 \(ASIS&T\) 年次大会](#)と日程・場所を併せて開催されました。23か国から約150名の参加者があり、日本からは筆者を含め5名が参加しました。



DC2010の会議風景

20日にはチュートリアル、21～22日には基調講演、ペーパーセッション、プロジェクトリポートが行われ、これらと並行して各種コミュニティによるセッションやワークショップが開かれました。

#### 1. チュートリアル

チュートリアルでは、ダブリンコアの基本的な概念やこれまでの経緯についての講義と、セマンティック・ウェブの基礎と実践についての講義が開かれました。データをセマンティック・ウェブに適合した形で提供するための方法として、次のような「SAFARI」の六つのステップがあることなどが紹介されました。

- S : Start Simple (まずはダブリンコアの基本 15 要素から始める)
- A : Add to the Core (独自要素とダブリンコアの 15 以外の要素を追加する)
- F : Facets (値の記述に分類やシソーラスを使用する)
- A : Adopt Standard Vocabularies (標準化された語彙を適用する)
- R : RDF and Web Identifiers ([RDF \(Resource Description Framework\)](#) により表現し、値の記述や要素の定義に URL を使用する)
- I : Integrate (既存の [Linked Data](#)[1]の集合への関連付けを行う)

## 2. 基調講演、ペーパーセッション、プロジェクトリポート

21 日の基調講演では、ダブリンコア開発時のメンバーの一人である [ウェイベル \(Stuart Weibel\)](#) 氏から、これまでのダブリンコアの歩みとこれからの展望についての講演があり、ダブリンコアの維持管理団体である [DCMI \(Dublin Core Metadata Initiative\)](#) の活動に対する評価や、コミュニティ間の連携を強めていくことの必要性などが述べられました。

22 日の基調講演では、[バーグマン \(Michael K. Bergman\)](#) 氏から、現在の [Linked Data](#) は、記述に用いる語彙の誤用、各語彙間の関連付けの欠如などの問題があり、セマンティック・ウェブの志向する機械的な意味解釈という目標との間に「ギャップ」が存在することが指摘され、DCMI がこれまでの経験と権威を活かし、その「ギャップ」を埋める役割を担っていくことへの期待が述べられました。

ペーパーセッション、プロジェクトリポートでは、FRBR(書誌レコードの機能要件)[2]モデルに対応したアプリケーションプロファイルの開発など、FRBRに関する3本の発表があったほか、図書館や政府機関から、ダブリンコアメタデータの適用事例が数多く報告されました。

## 3. 図書館関係コミュニティによるワークショップ、特別セッション

[図書館アプリケーションプロファイルのタスクグループ](#)では、DCMI の下で整備が進められた、相互運用性を担保するための基礎的なモデルである [Abstract Model](#) や [Singapore Framework](#) を反映し、また近年の [Linked Data](#) を巡る動きとも歩調をそろえることを目的として、図書館アプリケーションプロファイル (DC-Lib) の改訂を検討しています。このタスクグループのワークショップでは、[改訂版の草案](#)をもとに、スコープと機能要件、概念モデル、語彙の使用法について議論が行われました。

まずは、DC-Lib のスコープをどこに設定すべきか、目録対象資料のうち単行資料や継続資料といったテキスト形式の資料に限定するのか、博物館や公文書館の資料についても範疇に含めるのかについて議論されました。その結果、適用対象に境界を定めるのは難しいため、従来の図書館のメタデータが主たる記述対象としてきたテキスト形式の資料に焦点を置くが、適用対象の限定はしないということに落ち着きました。

DC-Lib の概念モデルについては、図書館コミュニティ以外とのデータ交換を考慮し、シンプルな

概念モデルとすること、ひいては FRBR モデルを採用しないことが、昨年度の会議で決定されました。しかし、体现形 (manifestation) と個別資料 (item) の関連については、記述に対するニーズが高いこともあり、今回のワークショップでの議論を踏まえて、体现形には DC-Lib で独自定義する「[bibliographicTextResource](#)」のクラス、個別資料には FRBR の「Item」のクラスをそれぞれ使用することになりました。

DC-Lib 改訂の最終草案は 2010 年内にまとめられ、2011 年初めには確定される予定です。

DC-Lib タスクグループとは別に、動向が注目されるのが [DCMI/RDA タスクグループ](#)です。DC-Lib は、FRBR のように複雑な概念モデルを解さない他のコミュニティとのデータ交換を考え、シンプルな概念モデルをとることにしていますが、DCMI/RDA タスクグループでは、FRBR モデルを取り入れた目録規則である [RDA \(Resource Description and Access\)](#) に基づいて作成された書誌データを、FRBR モデルを生かした上で、セマンティック・ウェブに適合した形式で提供するための検討を行っています。今後の課題としては、RDA 本体との関連付けや効率的な語彙の活用をどのように行うかを考える必要があるとのことでした。

会議全体を通じて Linked Data に対する強い関心が寄せられており、特に Linked Data に関する特別セッションでは、Linked Data として書誌データを提供する際の概念モデルや語彙の使用法について、活発な議論がありました。Linked Data としての書誌データの表現方法については、[米国図書館協会 \(ALA\)](#) や [国際図書館連盟 \(IFLA\)](#) の年次大会で引き続き議論を行うこととなり、今後の動向が注目されます。

#### 4. まとめ

ダブリンコアの開発から 15 周年、会議開始から 10 周年の節目にあたる年ということもあり、ダブリンコアとその維持管理団体である DCMI の今後のあり方を含めた自らの存在意義に対する問題意識が会議全体を通底していたという印象を受けました。また、Linked Data に対する図書館コミュニティの期待と関心の高さも、まざまざと実感しました。様々な図書館関係機関で Linked Data としての書誌・典拠データの提供が開始されていますが、データの表現形式については、それぞれの機関がそれぞれに考えているという状況で、ベストプラクティスといえる共通のモデルはまだ構築されていません。相互運用性の向上のためにも、今後、図書館コミュニティ内での連携の強化が望まれます。Web NDLSH に続き、書誌データ・名称典拠データの Linked Data の提供について検討を進めている当館も、こうした連携に参加していく必要性を感じました。

佐藤 良

(さとう りょう 収集書誌部収集・書誌調整課)

チュートリアルの資料は [Training のページ](#)、講演の資料は [DCMI Conference Paper Repository のウェブサイト](#) でご覧いただけます。

その他の発表スライドは以下のページにそれぞれ掲載されています。

- ・ [ウェイベル氏発表スライド](#)
- ・ [バーグマン氏発表スライド](#)
- ・ [DCMI/RDA タスクグループ発表スライド](#)

[1] Linked Data とは、セマンティック・ウェブを基盤として、個々のデータや概念に対して URI を与えて公開することで、様々なサイトの多様なデータを関連づけて利用できるようにするもの。

[2] IFLA. 『書誌レコードの機能要件 : IFLA 書誌レコード機能要件研究グループ最終報告』. 日本図書館協会, 2004.

<http://www.jla.or.jp/mokuroku/link.html>, (参照 2010-12-10)

#### ■ 関連文献 ■

- ・ 村上一恵. 「つながる、ひろがる、すぐ見つかる」を目指して—2009年ダブリンコア (Dublin Core) とメタデータの応用に関する国際会議 (DC2009) 参加報告. NDL 書誌情報ニューズレター. 2009, 2009.4.  
[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3507137\\_po\\_2009\\_4.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3507137_po_2009_4.pdf?contentNo=1),
- ・ 柴田洋子. セマンティックウェブにおけるダブリンコアの可能性<報告>. カレントアウェアネス-E988. 2009, No.160.  
<http://current.ndl.go.jp/e988>, (参照 2010-12-10) .
- ・ 白石啓. 2008年ダブリンコア (Dublin Core) とメタデータの応用に関する国際会議 (DC2008) 参加報告. NDL 書誌情報ニューズレター. 2008, 2008.4.  
[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3507133\\_po\\_2008\\_4.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3507133_po_2008_4.pdf?contentNo=1)
- ・ ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 (Web NDL SH) を公開しました. NDL 書誌情報ニューズレター. 2010, 2010.2.  
[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3050797\\_po\\_2010\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3050797_po_2010_2.pdf?contentNo=1)
- ・ “「セマンティック・ウェブと図書館：機械が情報を読む時代へ」 概要”. 国立国会図書館.  
[http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h22\\_event\\_report.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/h22_event_report.html), (参照 2010-12-10) .
- ・ 渡邊隆弘. セマンティックウェブと図書館. カレントアウェアネス-CA1534. 2004, No. 281.  
<http://current.ndl.go.jp/ca1534>, (参照 2010-12-10) .
- ・ Diane Hillmann et al. “RDA Vocabularies: Process, Outcome, Use”. D-Lib Magazine. 2010, Vol.16, Issue 1/2  
<http://dlib.org/dlib/january10/hillmann/01hillmann.html>, (accessed 2010-12-10).

## 新時代の目録規則へ向けて一

### 平成22年度第96回全国図書館大会第13分科会参加報告

[第96回全国図書館大会](#)が2010年9月16～17日、遷都1300年記念式典などのイベントの熱気に沸く奈良県で開催されました。奈良県における開催は1921年の第16回大会以来2回目とのこと。大会テーマは「温故創新—平城遷都千三百年からの発信」でした。奈良は最古の公開図書館「芸亭院」設立の地です。そのような歴史を持つ奈良に、遷都1300年という節目の年に図書館大会を招致し、新たな情報発信を行っていかうという大会実行委員会の意気込みが感じられるテーマでした。筆者は[日本図書館協会 \(JLA\) 目録委員会](#)が主催する第13分科会に運営係員として参加したので、その概要についてご紹介します。

ウェブでの情報発信の浸透、出版形態の多様化、[国際目録原則覚書 \(ICP\)](#) の策定、英米目録規則第2版 (AACR2) の後継規則である [RDA \(Resource Description and Access\)](#) の刊行など、目録を取り巻く状況は大きく変化しています。日本目録規則 (NCR) は1987年版の刊行以来、マイナーチェンジを繰り返しつつ、20年以上にわたって日本における標準的目録規則として機能してきました。しかしNCRの維持管理を行っている目録委員会では、先に述べた情勢を考慮し、今後は部分的改訂で対処するのではなく、いよいよ新しいNCRを策定する方向です。目録委員会はこの大事業を控え、目録を取りまく状況を改めて確認した上で、新しい目録規則策定の方針を示し、広く意見を求めるために分科会を開催しました。

大会二日目、17日に奈良県立大学キャンパスにて開催された分科会には、事前登録者数を上回る53名の参加者を迎えました。ほぼ満席となった会場で、まずは目録委員会委員による4本の発表が行われました。



開会挨拶をする原井委員長

## 【発表の概要】

### 1. 「目録規則をめぐる今日的状況」

1 つ目の発表は帝塚山学院大学准教授の渡邊隆弘氏によるものでした。様々な表現形式を包含して生成されうる電子資料の出現、インターネットの普及による“目録の危機”などに対応するため、書誌コントロール活動の見直しが国内外でなされています。目録規則の視点からは、OPAC の高度化への対応、メタデータの開放性の向上、図書館が作成するメタデータの付加価値の再考が必要とされているといった状況が、ポイントを押さえて紹介されました。

### 2. 「新しい国際目録原則」

2 つ目の発表は当館職員の横山幸雄によるものでした。オンライン目録などの情報環境に対応した新しい基準として、2009年2月に公開された「[国際目録原則覚書](#)」(ICP) の特色について、以下の3点が挙げられました。

(1) 各大陸を回り、計5回の会議を経て内容が確定した、その策定プロセス

(2) FRBR(書誌レコードの機能要件)[1]概念モデルの導入

(3) 適用範囲を拡大し、あらゆる種類の資料の、書誌データおよび典拠データのあらゆる面を対象としていること

今後策定または改訂される目録や書誌に関する標準の基盤として、ICP は重要な意味を持っている、とのことでした。[2]

### 3. 「RDA:『英米目録規則』の抜本的改訂」

3 つ目の発表は近畿大学の古川肇氏によるものでした。NCR1987年版のモデルとされた AACR2 の後継規則である [RDA](#) の目標や特徴を把握しておくことは、NCR を改訂する上で重要です。古川氏は RDA の主な特徴として、下記の点を紹介していました。

#### <全体的な特徴>

- ・データ要素間の順序や区切り記号など、構文の側面は規則の範囲外とする一方、典拠レコードを範囲内とした
- ・FRBR に忠実に構成した
- ・コア・エレメントを規定し、記述の詳細度を現行の3階層から2階層に変更した
- ・“item”はFRBR に従い個別資料を指すこととした

#### <個別の事項>

- ・資料種別による章立てをやめ、資料種別を構成し直した
- ・注記をエレメント化し、機械可読性の向上を図った
- ・著者標目に家族を加えた
- ・タイトル標目の統一標目化を図った
- ・従来の相互参照や一部の注記の拡張版として、実体間の関連を体系化し、関連の種類を関連指示子により示した

#### 4. 「JLA 目録委員会の活動と新しい NCR」

最後の発表は、目録委員会委員長であり当館職員の原井直子によるものでした。新 NCR の策定にあたっては、

- ・ ICP を始めとする国際標準との整合性を図ること
- ・ RDA を参考にしつつも日本の固有の事象に対処するため、今年度実施した「目録の作成と提供に関する調査」[3]などから判明する、現行 NCR の評価を反映すること
- ・ 実務的な規則とすること

に留意し、また規則自体の提供方法も紙媒体にとどまらず、より利便性の高い方法を模索することでした。

引き続き、改訂の主な内容として、以下の点が列挙されました。

- ・ 規定対象をエレメント（データ要素）の定義に限定すること
- ・ 注記をエレメント化すること
- ・ FRBR モデルに対応すること
- ・ 典拠コントロールに関する規定を重視すること
- ・ RDA に定める関連を参考に、関連の扱いを検討すること
- ・ 書誌階層を関連の一種として維持しつつ、基礎レベルの設定の仕方を改善し、さらに FRBR でいうところの著作を扱うことができる規則とすること
- ・ 排列については規定外とすること
- ・ 付録を充実すること

目録委員会では、改訂方針に対するパブリックコメントを 2010 年末まで募集し、その後は寄せられたコメントを参考に方針を固め、本作業に着手する予定であるとのことでした。[4]

#### 【質疑】

以上の 4 つの発表に対し、会場では熱心にメモを取る姿が見られました。引き続き行われた質疑応答は制限時間一杯の 1 時間に及び、多数の質問・意見が寄せられました。その中からいくつか下記にご紹介します。



質疑応答の様子

目録規則の対象とする範囲について：

コンテンツの電子化が進み、目録は資料と利用者をつなぐという時代から、資料と目録が一体化する時代になりつつあると考えると、目録規則は従来どおりの世界に閉ざされてはいけいではないか。

他のメタデータ作成規則との連携・すみわけ：

NCRの改訂は利用者の観点を重視している印象だが、むしろメタデータの共有という観点が必要である。そういった観点から見ると、[SIST \(科学技術情報流通技術基準\)](#)のような、これまで図書館界と接点がなかった標準との連携・すみわけが必要であろう。では、誰がメタデータを作成するかというと、著者、編集者、出版者、図書館、利用者みんなで作りに上げていくものとする。新しいNCRが、SISTにおける学術文献の引用の仕方といったものを参考にしつつ、目録規則としてメタデータの共有・作成をしていく上での指針となることを期待したい。

既存の基準、例えば雑誌記事索引での基準やSISTなどに目配りする必要があるかもしれないが、困難な作業であると思われる。そのことを踏まえつつ、それらを渡り歩くための、ある程度のレベルのマッピングを付録に取り込んで欲しい。

この他、図書館では扱わないが、関連のある情報へのリンクがあることが望ましく、そういったリンクへの基盤となる規則となることを願うとの期待や、大学・公共図書館双方で使用できる規則とするだけでなく、学校図書館も念頭に置いてほしいとの要望などが示されました。

#### 【所感】

ウェブを通じた一次情報への直接アクセスが可能となり、目録の存在意義が問われる中、新しい目録規則の策定といったテーマに多数の参加者が集まったことに安堵しました。目録委員会の一員として、その期待に応えられるよう、新しいNCRの策定作業に尽力していききたいと思います。

東 弘子

(あずま ひろこ 収集書誌部収集・書誌調整課)

[1] IFLA. 『書誌レコードの機能要件 : IFLA 書誌レコード機能要件研究グループ最終報告』. 日本図書館協会, 2004.

<http://www.jla.or.jp/mokuroku/link.html> ,(参照 2010-12-10)

[2] 「国際目録原則覚書」の策定については、本誌2009年2号(通号9号)にて紹介しています。

[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_3507135\\_po\\_2009\\_2.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3507135_po_2009_2.pdf?contentNo=1)

[3] 目録委員会が、国内の図書館における目録業務の実態を総合的に把握するために、2010年6月～7月にかけて行った調査。

<http://www.jla.or.jp/mokuroku/sheet.pdf> (参照 2010-12-10)

[4] NCR 改訂に向けた目録委員会の方針は以下に掲載されています。

<http://www.jla.or.jp/mokuroku/20100917.pdf> (参照 2010-12-10)

## お知らせ：OCLC を通じた JAPAN/MARC の利用提供を開始しました

国立国会図書館と [OCLC\(Online Computer Library Center, Inc.\)](http://www.oclc.org)が、OCLC の [WorldCat](http://www.worldcat.org) を通じて、国立国会図書館が作成した和図書の書誌データ JAPAN/MARC を世界的に提供することに合意したことについては、既にお知らせしました[1]。この合意に基づき、当館と OCLC は作業を進めてきましたが、2010年11月9日から、JAPAN/MARC が実際に WorldCat で利用できるようになりました。

OCLC に登録している世界中の図書館は、日本語資料の書誌データを作成する際に、JAPAN/MARC のデータをダウンロードして活用することが可能です。また OCLC に登録してなくても、誰でもインターネット上の WorldCat で JAPAN/MARC のデータを無償で検索・参照することが可能です。

なお国立国会図書館では WorldCat を通じての図書館間貸出しには対応しておりませんので、ご了承ください。

提供開始時点の書誌データ数は約 400 万件 (JAPAN/MARC(M)) です。今後定期的にデータを更新し、また著者名典拠データ約 90 万件についても、準備が整い次第提供する予定です。

(収集書誌部)

[1]OCLC を通じた JAPAN/MARC の提供への合意に関しては、「書誌データの基本方針と書誌調整：基本方針」のページに掲載されています。

[http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/oclc\\_agreement.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/oclc_agreement.html)(参照 2010-12-10)

## お知らせ：平成 22 年度書誌調整連絡会議を開催しました

国立国会図書館収集書誌部は、国内の書誌調整に関する情報の共有と交換により、書誌データの作成および提供の充実と発展に資するため、毎年「書誌調整連絡会議」を開催しています。平成 22 年度は、11月19日(金)に、「典拠コントロールの諸相—ウェブでの提供の課題を中心に」と題して開催し、招へい者・聴講者、および当館職員が出席しました。



書誌調整連絡会議の会議風景

典拠コントロールを実際に行っている機関と研究者の方々から、海外の動向、国内の目録規則、著者名検索および統一タイトル検索の動きについて何うとともに、今後の典拠コントロールの在り方について意見交換を行いました。

まず、帝塚山学院大学准教授の渡邊隆弘氏から「典拠コントロールをめぐる動向」、日本図書館協会目録委員長であり当館職員の原井直子から「次期 NCR について：標目の改訂方針」、国立情報学研究所准教授の大向一輝氏から「CiNii 著者検索」、筑波大学大学院教授の谷口祥一氏から「FRBR 研究会の取り組み—著作同定作業の試みと統一タイトル典拠コントロール—」と題した報告がありました。その後、当館から「国立国会図書館の活動：名称典拠の提供に向けて」と題して、当館における名称典拠のウェブでの公開に向けた検討状況について報告しました。

各報告の後に行われた質疑応答・自由討議では、

- ・典拠コントロール継続のためには、機械的な同定処理を組み込むなど、持続可能な仕組みを考える必要がある
- ・機械化による運用コスト削減と、人手による確認・品質保証とをバランスよく行う必要がある
- ・データの公開に当たっては、不完全な内容であるということを明示しつつ公開することが、むしろデータの信頼性につながるのではないかと

といった意見が出され、実務に即した意見交換がなされました。

また、統一タイトル典拠（著作単位での典拠コントロール）について、その重要性や適用範囲などが議論となりました。

11回目を迎えた当会議において、インターネット環境における膨大な情報の中で、検索の効率性を向上させる典拠の重要性と、その提供の方法について多くの示唆を得ることができました。会議の概要については、後日「[書誌調整連絡会議](#)」のページに掲載します。

(収集書誌部)

## 掲載情報紹介

2010年11月1日～2010年12月24日に、国立国会図書館ホームページに掲載した書誌情報に関するコンテンツをご紹介します。

- ・ [分類・件名 『日本十進分類法 \(NDC\) 新訂9版』 分類基準 \(2010年版\) を掲載](#)

『日本十進分類法 (NDC) 新訂9版』に対応した、当館における分類作業の基本方針と表の解釈を示す基準の2010年版を公開しました。

(掲載日：12月16日)

- ・ [Web NDLSH の紹介を英文で掲載](#)

National Diet Library Newsletter No. 175, October 2010 に、Web NDLSH (ウェブ版の国立国会図書館件名標目表) を紹介する記事 (英文) を掲載しました。

(掲載日：11月19日)

- ・ [分類・件名 国立国会図書館件名標目表 \(NDLSH\) 2008年度版追録\(2010年10月～2010年11月\)](#)

2010年10月～2010年11月に更新した件名標目のリストです。各月に新設した件名には以下のものがあります。

2010年10月：「ジーンバンク」「ぬいぐるみ」「弾き語り」など

(掲載日：11月11日)

2010年11月：「音訳サービス」「視覚化」「タブレット型端末」など

(掲載日：12月9日)

- ・ [雑誌記事索引の記事件数が1,000万件を突破](#)

2010年11月4日、雑誌記事索引の収録記事件数の合計が1,000万件を突破しました。

(掲載日：11月4日)

- ・ [雑誌記事索引採録誌一覧を更新](#)

当館が作成している雑誌記事索引に、現在記事を採録中もしくは過去に採録したことのある雑誌の一覧を更新しました。2010年11月25日現在の採録誌総数は、20,061誌で、そのうち、現在採録中のものは10,499誌、廃刊・採録中止となったものは9,562誌です。

(掲載日：11月25日)

## 編集者からの一言

(公) 典拠データの提供にあたって、不完全であることを理由に公開を控えるよりも、不完全であることを明示しつつ公開したほうがデータの信頼性につながる、との指摘を受けた。そのとおりと頷いて対応するか、そうはいつでもと尻ごみするか。

(私) 以前なら「整理業務」とっていた書誌データの作成・提供業務に足を突っ込んで〇十年、その「整理術」は家庭でも役立っているだろうか。

以上、半ば個人的な書き込みで失礼いたします。年の瀬につき、2011年の自分への申し送り事項として記したのですが、目録担当者にとっては人ごとではない問題のはず。第15号の各記事も、読者によっては課題となるものがあるかもしれません。それぞれの立場での、または集合知による解決を図っていかれたらと思います。卯年のウサギは「長いものにはまかれる」傾向あり、だそうですが、書誌データ・典拠データの国際的展開にあたり、このような旧・日本人的対応で問題なし、とはいえません。

(no year man)

**NDL 書誌情報ニュースレター (年4回刊)**

ISSN 1882-0468 / ISSN-L 1882-0468

2010年4号(通号15号) 2010年12月24日発行

編集・発行 国立国会図書館収集書誌部

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1

E-mail: [bib-news@ndl.go.jp](mailto:bib-news@ndl.go.jp) (ニュースレター編集担当)